

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：柁木 貴之

論文題目：国語教育と英語教育の連携—その歴史、目的、方法、実践—

本論文は、日本の学校教育において国語教育と英語教育を「連携」させるという発想やそのための理論がいかんして生まれたかを歴史的に概観し、そのなかで示された目的論と方法論を整理して明確に記述したのち、それらを踏まえた具体的な実践例の分析を通じてその成果を検証したものである。そして、最終的には、両者の連携に関する基礎研究資料を提供することを目的としたものである。

本論文は、論文の背景、目的、意義、方法、および論文の構成を記述した序章を除き、5章構成になっている。まず第1章では、両者の連携に関する先行研究として、大津由紀雄、岡田伸夫、鳥飼玖美子らの理論研究と中等教育での授業実践を分析した実践研究が紹介されたのち、それらから導き出される研究課題が(1)歴史的研究、(2)目的論の構築、(3)方法論の構築、(4)教材開発、(5)カリキュラムの研究、(6)評価方法の研究、(7)効果に関する研究、(8)教員養成プログラムの構築、(9)日本語教育との連携の模索、(10)海外の事例に関する研究の10種類に分類され、そのうち主に(1)、(2)、(3)、(4)、(7)が論文中で扱われることが明言される。第2章では、連携に関する議論の歴史が概観される。まず、明治期から現在に至る議論の歴史が、国語教育と英語教育との関係性や連携実践の有無によって、国語教育と英語教育が乖離していた明治期から1950年代までの「連携前史第1期」、言語教育という理念が登場した1960年代から70年代にかけての「連携前史第2期」、両者の共通基盤が模索された1980年代から2000年代にかけての「連携前史第3期」、さらに連携が実践として開始される2000年代から現代までの「連携史黎明期」の4期に分類され、それぞれの時代にどのような議論がなされていたかが、政策や実践との関連において記述される。また、それを通じ、国語教育と英語教育の連携という発想が必ずしも近年になって現れたものでなく、日本の言語教育史のなかで形を変えながら連綿と存在していることが明らかにされる。第3章では、これまでの章で見た議論のなかから抽出された目的論と方法論が記述される。連携の目的の主立ったものとして、生徒の言語能力向上、生徒の意識変化、教師の意識変化の3つが挙げられ、それぞれがどのように提示されてきたかが詳述される。また、方法論の議論においては、共通目標を前提とし、授業者の人数や共通教材、共通活動の有無に応じていくつか違った実践の流れがある得ることが、具体例とともに示される。

第4章では、前章の理論を踏まえた授業実践が記録・分析・考察される。まず、共通教材・共通活動を定める実践の例として、2011年度から13年度にかけて、東京大学大学院教育学研究科・教育学部と教育学部附属中等教育学校との共同科研費プロジェクトの一環として行なわれた「メタ文法能力育成」のための授業が記述され、それについての研究成果が示される。次に、2008年度から14年度にかけて著者自身が授業者の一人として取り組んだ高等学

校における「国語教員と英語教員のチーム・ティーチング」授業が分析される。さらに、2010年度から今日まで著者自身が「共通教材・共通活動を定めない実践」として行なっている大学の授業が記述・分析される。終章となる第5章では、これまでの議論が整理され、たのち、本論文で掲げた連携の意義のうち、とくに「別々に存在する日本語と英語の知識・技能をつなげ、相互に関連した知識・技能の体系を築くことで、言語能力全体を高めること」、「『言語』という視点を持つことで、複数の言語やその背景にある複数の文化を相対的に捉えること」という二つの意義については、現在の国語科、英語科の枠内では実現しづらいものであることが指摘され、国語教育と英語教育がそれぞれを意識し合うことの重要性が示唆される。さらに今後の研究課題として、第1章で掲げられた10の課題のうち、(4)、(5)、(6)の理論研究と(7)、(1)、(10)についてのさらなる研究が挙げられる。

国語教育と英語教育が何らかの形で結びつきうること、あるいは結びつくべきものであることは、多くの国語・英語教師が直感的に把握していたことである。それどころか、日本の伝統的な英語教育のかなりの部分が実際には国語教育であったという考え方もできる。日本の英語教育が昭和後期に実用コミュニケーション主義に大きく舵を切って以来、両者の関係性が希薄となり、そのような流れのなかで教科を超えた言語能力の育成が注目されるようになったのは、ある意味で必然とも言える。とはいえ、国語教育と英語教育の結びつき方に関する提言は、多くの場合、個人の体験談に基づく試案にすぎず、確固たる学術的基盤に基づくものではなかった。本論文の最大の功績は、両者の連携に関して明治以来連綿となされてきた議論を網羅的に踏まえたうえで、新しい時代に即した連携のあり方を提示した点にある。とくに議論の歴史を丹念に拾い上げた功績は、審査員一同が大いに評価する点であった。一方、実践研究中のキーワードの一つである「メタ文法能力」に関する定義と説明が不十分であるとの指摘もなされた。しかしながら、この問題点は先に記した本論文の価値をいささかも損ねるものではない。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。